



尾道商業会議所記念館

第40回企画展示

宮本常一とあるく・みる・きく

～歴史的・民俗的な尾道産業の風景～

2021（令和3）年5月28日～10月20日

展示解説

「旅する巨人」とも称される民俗学者の宮本常一は、尾道市域にもフィールドワークの足跡を残しています。

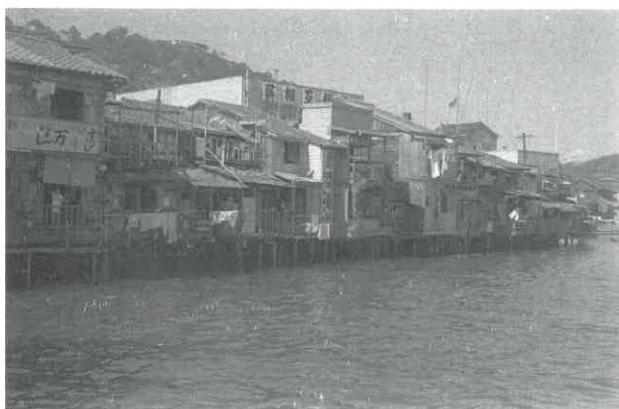
島嶼部への航路発着の起点となる旧尾道市街では、駅前界限の海岸に見たマーケットや行商の光景、古寺と民家が肩を並べて寄り添う千光寺山南斜面の山手界限、因島では村上海賊ゆかりの史跡から造船所の風景、生口島（瀬戸田）では塩田とそれで財を成した堀内家、耕三寺と門前商店街などを見聞し、それぞれの場所で写真に記録しています。

本展では、宮本常一が遺した膨大な写真アーカイブの内から、尾道市域に見た昭和30年代後半～40年代前半の産業風景を、歴史的・民俗的な視点も交えてご紹介してみます。



完成して間もない尾道大橋の上で宮本常一
1968（昭和43年）8月 鮎本刀良意撮影
（周防大島文化交流センター・宮本常一記念館蔵）

旧市街をあるく ～駅前海岸マーケット～



海上から見た国際マーケット街

1959（昭和34）年8月23日 宮本常一撮影

（周防大島文化交流センター・宮本常一記念館蔵）

海にせり出す木造家屋の家並みー 尾道駅前の海岸通りに形成された、「国際マーケット」と呼ばれた商店街を、海に面する（せり出した）裏側から写した一枚。

国際マーケットはその東側に並んだ「荷揚場マーケット」と共に、終戦後の混乱期、非合法に開かれた闇市（やみいち）を源流とし、国際は1946（昭和21）年の秋から、荷揚場はその翌年（1947・昭和22）の夏にそれぞれ開設されました（何れも公的な許可を得ての開場）。

国際の名前通り、入居者の半数は外国人（朝鮮半島と中国）で占められていました。

宮本写真に記録された国際マーケットを眺めて見ると、建物は2階建ての長屋仕立てで、1階部分は店舗、2階部分が住居となり、消失した1965（昭和40）年には26軒の店舗兼住宅が見られたようです（住居としてのみの利用もあった）。

旧市街をあるく ～晩寄り～



晩寄り 土堂海岸

1961（昭和36）年5月 宮本常一撮影
（周防大島文化交流センター・宮本常一記念館蔵）

魚介を扱う露店を、尾道では「晩寄（ばんよ）り」さんと呼びます。その語源については今一つはつきりしませんが、獲って来た魚介を晩に選（よ）り分けて、翌日に売りに出していたから、或いは昼に注文を取って回り、夕飯前に届けるものだったから等の諸説が聞かれますが、定説というものは見当たらないようです。

晩寄りさんの殆どは女性が中心で、旦那さんが漁で得たものを、奥さんが売り捌いたというのが本来の姿だったようですが、40年に亘って晩寄りさんを生業とされて来た方のお話によれば、夫婦作業のその姿が消失してから、もうかなりの年数が経過しているとの事で、今日では漁師さんと販売者は別者になっているそうです。

しかし本来の形態は変われど、それぞれの晩寄りさんにお得意さんが付き（その昔は市外から買い付けに来る人の姿もあったとか）、港町尾道らしい風情も醸し出して、今に愛され続けています。

そんな晩寄りさんの始まりには、天下人豊臣秀吉の時代にまで遡る、こんな縁起（えんぎ・由緒）が秘められています。

「其のち毛利のきみの代に至り、大相国、朝鮮をかたむけさせ給ひし時、舟数十艘に六十余人、討乗軍ふねを漕渡して、御感あり。この時十七人黄泉路にまかりければ、十七人のやもめありけり…」

—『尾道漁村記』（写本）尾道市立中央図書館蔵—

毛利氏がこの地を治める時代（中世戦国期）、豊臣秀吉の朝鮮出兵（文禄・慶長の役）で、60人の海民が水夫として10余艘の船を漕いで渡り、その功を感謝された。しかしこの内17人は戦死して、17人（家）の戦争未亡人が生じた…というお話。

この残された寡婦に対して、「魚類売買御免」、即ち魚介を自由に売買してもよいとの免状（許可）を与えたというもので、これが尾道の露店で魚介を販売する女性、晩寄りさんの起源になるとして長らく語り伝わります。

因みに今日の許可証は、広島県の魚介類等行商業認定という行政上の許可証を得てのもので、太閤云々はもはや忘れ去られつつあるお話です。

郊外をあるく ～吉和漁港周辺～



吉和漁港と通称・漁民アパート

1965（昭和40）年12月 宮本常一撮影
（周防大島文化交流センター・宮本常一記念館蔵）

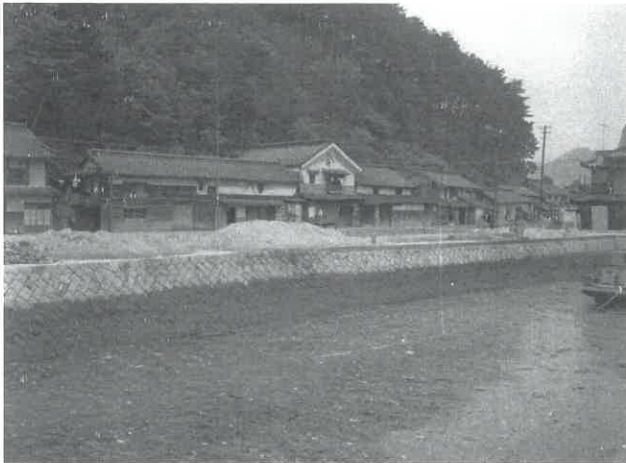
1967（昭和42）年、吉和漁港の傍に建った高層アパートが、「漁民アパート」と通称された、漁師など海を生業にした人々を対象とする集合住宅（尾道市営正徳浜住宅）でした。

吉和漁港では、因島の箱崎、三原の能地などと並び、漁船や行商船（履物や莫産などを尾道で仕入れて販売）をそのまま住居とした「家船（えぶね）」の慣習が長らく見られていましたが、漁民アパートによって生活様式も変わってゆくと、次第に消失する事となりました。



吉和漁港 1957（昭和32）年1月 土本壽美撮影

島方をあぐる ～因島中庄の柿渋倉庫～



因島中庄徳永区入川沿いの柿渋倉庫
1961（昭和36）年5月 宮本常一撮影
（周防大島文化交流センター・宮本常一記念館蔵）

因島中庄町徳永区の入川沿いを写した一枚。山に「キ」と書いた屋号が見える土蔵に目が留まります。写真中央に配されているところから、宮本もそこにポイントをおいて撮ったのかもしれませんが。

土蔵は柿渋の貯蔵庫でした。全盛期には島内に30軒、中庄だけでも10軒もあった柿渋製造業者の中で、最後の1軒となっていた宮地家の柿渋倉庫になります。

柿渋とは、渋柿を発酵・熟成させたものから液体を抽出したもので、防腐作用があり、加えて防臭・防菌、強度を高める効果もあり、木材の下地塗り等にも用いられています。

中庄にあつては、漁網や酒の搾袋の染色で用いられるのが多かったそうです。

備後地方における柿渋生産の中心地・主産地であった因島でも、島内全体の4割強を占める生産量にあつたのが中庄村でした。

江戸時代の各村記録によれば、島嶼部で盛んな柑橘を抜いて果樹では柿の方が多く、中庄村の柿の木には一本ずつ税金がかけられていたなど、柿の木に対する値打ちのほどが窺われます。



因島の柿渋商標ラベル（尾道市市史編さん委員会事務局蔵）

島方をあぐる ～日立造船向島・因島工場～



日立造船向島（西）工場
1961（昭和35）年5月 宮本常一撮影
（周防大島文化交流センター・宮本常一記念館蔵）

日立造船の工場は因島と並んで尾道対岸の向島にも所在しました。戦中から戦後にかけて日立造船向島工場に勤めていた郷土写真家・土本壽美さん（故人）の証言から、ありし日の造船所風景の一コマを甦らせてみます。

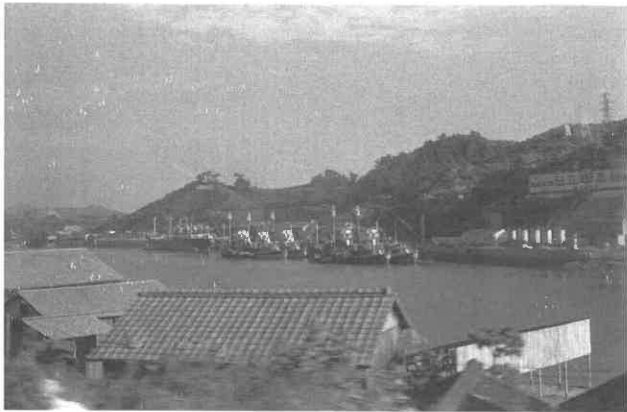
～ 大元丸の進水 ～

尾道と向島の間を流れる尾道水道の幅は約250m。そこへ全長134mもある船が進水しました。1951（昭和26）年9月16日、日立造船向島西工場で行われた外航船「大元丸」の進水式です。

一般的に進水は、船台という斜めになった陸上の台の上に船体を組み立て、水に滑り出すようにして進水させます。しかし狭い尾道水道では不可能。そこで西工場では、船体が着水したところで船の向きが尾道水道と並行になるようアンカーチェーンで牽引しながら進水を行いました。緻密な計算によるこの進水方法には、多くの人の目を惹くものがありました。



大元丸進水式 土本壽美撮影



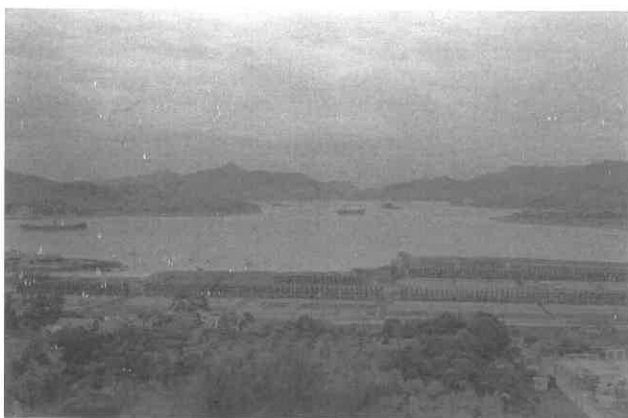
日立造船向島（東）工場へ停船中の捕鯨船
1959（昭和34）年5月 宮本常一撮影
（周防大島文化交流センター・宮本常一記念館蔵）

～ 捕鯨船の入港 ～

1947（昭和22）年頃から日本は鯨（クジラ）を捕る事で食糧難の時代を乗り越えてきました。捕鯨は鯨を保存して輸送する冷凍貨物船と、実際に鯨を捕獲する複数のキャッチャーボートで船団を組みました。その為に多くの船を必要とし、向島工場では日本水産の捕鯨船「多度津（たどつ）丸」の改装工事で賑いました。

春になると海に出ていた船団が帰港し、船の修理や整備を行います。長期滞在する船員達のみならず、その家族もやって来て、造船所や街は基地のような役割を果たしていました。

島方をおろく ～瀬戸田の塩田と商店街～



向上寺からの眺望と塩田風景
1959（昭和34）年8月 宮本常一撮影
（周防大島文化交流センター・宮本常一記念館蔵）



瀬戸田港近くの堀内邸
1961（昭和35）年5月 宮本常一撮影
（周防大島文化交流センター・宮本常一記念館蔵）

瀬戸田を始め芸予から備後の島々と沿岸部では、塩作りの為の塩田が各所に設けられ、「備後塩」と称された塩の生産が盛んに行われていました。

中世の時代、兵庫関（現在の神戸港）を往来した船の記録である『兵庫北関入船納帳』（1445・文安2年）によると、積荷の筆頭が塩であり、それを輸送する船では瀬戸田からが64艘で最多を見えています。

その瀬戸田における製塩業で、筆頭の位置にあった経営者が堀内家でした。

塩田経営以外にも海運業、金融業、不動産（土地集積・所有）等々、多角的な商業活動を展開し、1897（明治30）年の広島県内多額納税者ランキングで上位8位、直接国税（地租・所得税）納入額では尾道町の豪商筆頭である橋本家に次ぐ順位にありました。

瀬戸田港から旧堀内邸を経由して、耕三寺山門まで続く約600mの通りが「しおまち商店街」です。耕三寺の参道商店街として形成されたその町並みは、旧き佳き風情と新しいものが違和感なく同居し、今も昔も観光客に親しまれる瀬戸田のメイン・ストリートとなっています。



耕三寺参道商店街（現しおまち商店街）
1961（昭和35）年5月 宮本常一撮影
（周防大島文化交流センター・宮本常一記念館蔵）